



夏に近づき、いろいろな昆虫や鳥などが盛んに活動し始めました。チョウやガの仲間が、花々の間をヒラヒラと飛び回る様子もあちらこちらで見られますね。

しかし、中には幼虫の時代や成虫になってから毒のある毛を持っていたり、毒針を持つものもあります。時には、野外での活動中にこれらの昆虫に刺されて皮膚が腫れたり、炎症を起こすこともあります。気をつけて行動しましょう。

ところで、年によって大発生する幼虫の種類が違ってくる場合があります。昨年は、ホウオウボククチバが大量発生し、街路樹や学校に植えているホウオウボクの葉が数多く被害に遭いました。今年はタイワンキドクガやキオビエダシャクの幼虫をよく見かけます。



タイワンキドクガの幼虫

ドクガやカレハガ、ヒトリガ、イラガの仲間の幼虫やさなぎには、さわると痛そうな毛が生えています。実際に触れると、皮膚に刺さり、皮膚炎を起こす毛が混じっています。これらの幼虫は、葉のかげや木の幹にいたりして、知らないうちに刺されてしまうことも多いようです。その中でもイラガの幼虫は、日本で一番強い毒を持つと言われ、刺されると激しく痛み、腫れもひどくなります。



イラガの幼虫

もし、野外でこのような毛虫に刺されたときには、こすらないでください。これらの幼虫の毛は、こすればこするほど折れて小さくなり、あちこちへ広がります。刺されたときには、セロハンテープなどでそっと押さえて、毛を取ってから流水で洗い流し、虫さされの軟膏などを塗ります。中には、毛を持っていても毒のない虫もいますが、油断はせず、用心していきましょう。

(文責：玉村かおり)